

Ｔさんが知り合いの自動車整備工場を訪れた時のことです。最寄りの駅まで、社長が自家用車で迎えに来てくれました。

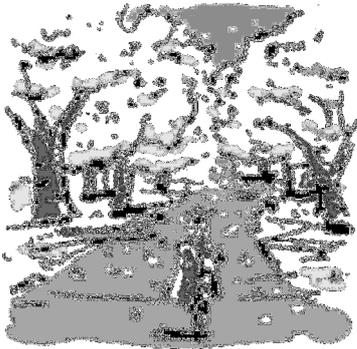
社長の愛車は、いわゆるファミリーカーで、最新型の高級車ではありません。むしろ年季の入った古い車種でした。

道中、さりげなく車のことを聞くと、社長は「車というのは、丁寧に整備すれば、意外と長く乗ることができるのですよ」と答えてくれました。そして、今乗っているファミリーカーには、二十数年間乗り続けていることを教えてくれたのです。それを知ったＴさんは、心底驚いたといいます。

実は、同社では「クルマ社会と地球との調和」という理念を掲げています。それは、車を整備することで燃費をよくして一台の車の寿命を伸ばし、地球資源の節約に寄与するというものでした。社長の愛車は、その証明であり象徴であったのです。

さて、このような発想のヒントは、社長が所属している倫理法人会で提唱している「地球倫理」の理念にありました。同会では、経営の最大の眼目を「地球の安泰」に置き、自社の営みがその後押しになるような事業を目指しています。

人間は、大なり小なり、自然に拠って生きています。時にはその一部分を取り壊し、利用しなければ生活は成り立ちません。つまり、広い意味で地球・自然の破壊によって生きているのが人間だと言えるでしょう。「安泰」とは安らかで無事なことであり、「繁栄」とは勢いが盛んになることです。



地球への感謝の思いを深め

地球倫理の実践に取り組もう

経営上の眼目と言えれば後者を真っ先に思いがちですが、そこだけを目指しては地球環境との調和が図れず、自分達の生活そのものを脅かすことになりかねません。だからこそ、繁栄の前に地球の安泰を先に置くことが事業経営上の重要事になるのです。このことを腑に落とした上で、①地球の恵みに対する恩返し、②地球を破壊した罪ほろぼしの意識を持つことが、地球倫理に基づいた経営を実践する第一歩。そして、その補償をすべく努めることが「地球人の地球に対する倫理の実践」(『新経営倫理学』二十九頁)となります。先に紹介した「社長の愛車」の事例は、地球環境の保全と自社の事業との調和を目指した努力の証とみることでできるのではないのでしょうか。

本来どうすることもできない天与の自然現象に対しての心得は、「畏敬し、讚美し、さらに感謝する」ことです。その実践は、早朝の清々しい空気を胸一杯に吸い、美しい日の出を拝む時、一杯の水で洗面する時、生命の源である食事をいただく時など、日常生活の中で地球とのつながりを意識することから始めることができます。

地球への感謝の思いを日々深め、自社の地球倫理の実践のあり方を問い続ける時、具体的な「わが社の地球倫理実践」の取り組みが閃くに違いありません。

「感謝」、「畏敬」、「慎欲」(わがままや多欲をつつしむこと)をキーワードに、グローバルで壮大な「地球倫理経営」を目指していきたいものです。